



里見八犬傳拾一編
卷十七



~13
709
65



門連 13
番 709
卷 63



明治二十六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第九輯卷之十七

東都 曲亭主人編次

第三百二回

勲功を譲りて親兵衛法會へ赴く
賞禄と後めて安房侯寒御を温む

却説荒川清澄們の大江親兵衛と共侶の館山の城の重郭と那這と巡檢は
那活路ある邊へ来て茲歎と向ひて立寄りたる果まで大なる石ありて半分は土埋
まらちこれいさう
まらち。便是地道の門戸を石の二片に裂きうと听ける。毫もその跡をりて清澄們は
疑ひのし親兵衛孝嗣逸時景能次團太卿三們的五六名俱は這地道より城へ
入る毎に訝り思はるも。倘そ地方の違へる故と找と近づて件の石とほらくと又と元
るふ列衣を処おのりて。舊の如ふ合ふけん石の真中にお筋ありて才おその迹送りて親兵
衛急ふ次團太と卿三を走らう。御留入りの城外の地道の石とをける。一霎時

八犬傳九輯卷十七

大塚堂藏

あつかり多し。却親兵衛は報もせず。那里の石も。這裏あつて。裂衣の処。愈合より。又入るるも。い
 りぞ。と。親兵衛領多。清澄們。うち向ひて。既ふ。一。侍り。と。前後の石門。裂衣。用ひて。
 嚮ふ。出入の自在。有り。我靈玉の。應驗。も。畢竟。役優。優。塞と。伏姫神の。冥助。
 る。ま。この。這石。又。舊の。如く。な。片。合。ん。て。い。わ。う。あ。つ。も。い。は。し。備。列。衣。れ。る。依。老。あ。ふ。賊。徒。
 ち。よ。り。脱。出。て。網。を。漏。る。も。ま。う。ん。と。然。る。便。り。と。い。は。し。則。則。御。方。の。大。利。也。神。助。真。福。
 ま。ま。く。奇。世。の。復。治。易。治。る。ん。や。と。い。ふ。大。家。然。ん。と。心。で。存。一。感。嘆。も。り。け。登。時。親。兵。
 衛。又。い。ふ。這。活。路。の。い。の。改。木。机。の。忠。告。也。昔。の。城。主。が。作。り。て。後。は。這。巨。石。を。り。て。
 塞。だ。し。し。り。少。知。で。れ。ば。何。の。故。の。塞。だ。し。や。あ。の。民。を。回。漏。ま。し。れ。ば。今。は。送。感。割。か。
 ら。せ。せ。せ。入。る。者。の。や。あ。と。隨。從。の。雜。兵。們。を。召。近。し。て。尋。ね。し。知。れ。り。と。い。ふ。者。を。り。け。り。ま。う。
 ば。荒。磯。南。弥。六。が。弟。阿。弥。七。の。も。夜。南。弥。六。が。館。山。の。城。入。り。て。素。藤。小。次。を。肩。へ。て。
 那。身。の。亦。来。介。共。侶。の。戰。死。の。事。の。風。聲。と。も。傳。へ。し。り。素。藤。が。崇。と。懼。れ。家。を。

す。て。や。う。乗。宅。着。と。俱。殿。臺。を。寄。隊。の。陣。營。身。を。寓。て。し。て。告。て。愛。顧。と。請。ひ。清。澄。
 肇。て。南。弥。六。一。個。の。弟。あ。つ。と。阿。弥。七。が。二。男。増。松。を。南。弥。六。が。養。嗣。せ。し。と。約。束。あ。つ。
 る。ま。も。詳。し。少。知。り。仔。細。及。び。妻。も。子。も。そ。の。陣。營。に。留。め。て。杖。持。ま。し。た。の。日。
 阿。弥。七。の。雜。兵。ふ。ら。ち。交。り。清。澄。が。隊。の。後。を。俱。城。内。入。り。と。い。は。し。伴。當。の。中。に。在。り。件。の。
 活。路。の。監。觸。と。方。僅。親。兵。衛。が。向。ひ。及。び。か。そ。を。報。る。中。小。可。が。曾。祖。の。時。も。這。夷。
 瀋。郡。を。並。日。善。の。乙。樓。の。村。長。を。い。ひ。大。父。の。時。より。家。衰。へ。寒。民。お。做。り。ひ。へ。と。も。
 些。々。の。舊。記。も。残。り。家。の。口。碑。も。傳。へ。る。と。い。は。し。自。今。お。尋。み。よ。り。て。思。ひ。出。し。給。抑。
 大。の。館。山。の。城。の。昔。上。總。介。平。廣。常。主。の。別。館。を。い。ひ。ふ。有。一。年。這。頭。の。平。山。より。山。
 屋。脱。く。今。の。副。門。の。外。面。を。固。より。出。く。海。入。り。る。路。約。莫。二。三。町。あ。つ。り。洞。お。做。り。
 けれ。城。内。より。悄。ろ。活。路。不。宜。か。る。べ。と。當。時。の。家。臣。們。愛。懼。ひ。單。廣。常。主。の。
 妙。と。せ。ま。二。の。老。黨。の。宣。を。世。の。武。士。を。者。の。敵。お。攻。め。て。普。城。せ。し。命。運。其。首。ふ。

窮乏潔く戦殺す。然るに豫より城内の活路を為れる命を免れんと欲するの準備も
 多て躬方のある便あれど敵も亦入る便あり。出沒素より安定するぬ山賊の住る洞をこそ
 然る準備ありもせむ。武士の家より要る者も亦開と悉穿崩して埋めざる無益の
 事小民を勞もて雜費も亦少く下。這四下の岡の邊より大なる石を運れ、殊に勝れど
 擇と曳し、前後の洞口を塞ぐべし。その世も亦え人の疑いと惹きせし夫役の農
 夫を誡め、秘よ風聲をきき、と町寧ふ命あるひ一二の老黨と近習の外あり
 意と知れぬひ小可が遠祖の當時介殿常をひの近習にけれ、夢知ることもあらず
 介殿死をひより先祖の接村へ退隠して子孫小可毎に至るまで、十四五世ある
 ひのぬ大父の時兵火の為る家系焼亡ひひ、具不知りひひ、と公と親兵衛ちり
 ぞ、ゆゑに異聞へ廣常主の別館の脱路もと嫌ひ、我義兄弟大山道節が火
 遁の術書と燔棄し、と日と同くして語るべし。今阿弥七微も、我疑いと解くより

あんや、寔に珍重々々と只顧嘆賞あり、清澄澄澄の亦然と感して神佛冥助の
 不可思議と畏るる中、清澄の親兵衛亦徳々と阿弥七が素生その子のゆ
 さ、ゆゑに隨解示せ、親兵衛屢々點頭。現那兄中、這弟あり、南弥六を義侠を
 り、館の兒與に戦殺する、後るるん、送恨のゆ、然るに豫に増松と養嗣の約
 束甚妙に宿老り、凱陣をあら、その要をせえ上ぬ、必因忠賞あるべし、とて
 清澄仔細及ぶ、そ、あ、巡檢、且、瀾、妖賊伏誅の趣の注進、とて、
 這方へ東ませとら連立、本城へ赴く程、友勝、良干、龍置れ、と、獄、合、既、不、焼
 亡、る、并、が、邊、より、遠、く、ぬ、走、馬、場、の、藪、陰、新、は、壤、と、小、高、く、装、て、雛、松、と、我、言、士、饅
 頭、有、けり、親、兵、衛、と、れ、を、た、り、く、那、海、松、并、軻、遇、八、分、情、地、の、埋、め、り、と、い、ひ、南、弥、六、が、首
 塚、に、茲、る、べし、思、ひ、に、清、澄、澄、澄、を、吸、住、め、り、城、の、良、民、を、尋、る、ふ、知、る、者、あ、り、と、答、て、云
 々、の、塚、の、野、暮、沙、雁、太、が、亡、骸、を、瘞、め、り、ま、る、と、賊、徒、の、思、ひ、ひ、ら、と、實、に、猜、し、あ、ら、ん、と、

かゝる情地のありせし。荒磯が塚のいふ親兵衛點頭て阿弥七の召近は。是は
軻遇八の情地のありせし。荒磯が塚のいふ親兵衛點頭て阿弥七の召近は。是は
兄の塚の實は是と祭るべし。我も廻向と云ふれを先阿弥七の持して然る清澄と共侶の
揖して目礼してけれ。高宗以下の士卒は。次園太卿に至るまで俱々の塚の朝
ひく。合掌を念佛せざるものければ。阿弥七の只辱さず坐感涙の拭むと覺其頭は。けり
良民は。感激して鼻もも梯れ老も弱も涯のあれ。竟も逝く身も忠義の與の徳の
命と捐てそ栄と見孫も貽せられ死映ありと思ひ。徳而荒川清澄を親兵衛と共
侶有功の諸士と領て。城の正聴も集會を登時清澄の親兵衛も席と譲んと。町
寧も請找めし。親兵衛敢て。詞意迫り論を。燕毛の序を。我の九歳の
総角也。荒川主の父も。又尊卑の。序を。荒川主の討隊の大將即館の
御名代也。我の臨時の副將也。然ると小功あれ。席と犯さ宿老も。獨蒞如。做れ。のこ
る。是君侯大不敬。僭稱是より甚。決て從ふ。と推辭む。清澄推

禁めて。理論は。定然あると。軍旅の序次は。非常で功者の上在り。功者下
在ると。那剛臆の坐の如。開巻の。序次は。做さ。誰
又命と惜ま。各主君の。與の。戦功と。勳も。愚老の。賊徒誅伐の。仰と。稟され。も
寸功を。因て。重て。館も。和殿は。征伐を。命せ。て。立地。大功も。信れ。王客地。目易。今
日討隊の大將大江。則和殿も。愚老の。當副將也。信れ。席と。譲ると。和殿
干て。非礼。あ。誰。僭稱と。の。然と。謙退せ。られ。始。愚老と。羞教。い。で。我
意。小儘。一。と。親兵衛。美。云。と。論。争。果。一。高宗。逆友。難。致
方。と。推制。相。和。解。大江。氏の。謹慎。の。本。荒川。主。の。謙。遜。辞。讓。の
世の家宰の。龜鑑と。志。我。們。證。人。之。枉。且。同。席。也。事。と。議。益。死
辭。讓。の。時。を。得。ま。不。便。の。友。勝。良。干。們。及。逆。時。も。景。能。も。共。侶。の。勸。め。一
親兵衛。竟。已。と。得。清。澄。と。共。上。坐。在。是。より。高宗。逆。友。有。功。の

諸士次第と追て左右側を羅列せり。但孝嗣と次園太門の家臣の列の中内れ故意
遠侍不在。當下荒川清澄の親兵衛と商議して稲村龍田の両大城へ妖賊伏誅の趣を
孝嗣と次園太卿と親兵衛の従ひ来て軍功あり。支の顛末その来歴を寫し載し
準備亟に敷言。家老隸の番士をける那範内葉四郎も這回清澄の従之陣中
在りて隨即件の葉四郎と詰茂嘉福の使を課て先稲村へ遣き親兵衛も亦
自呈書一通を書寫けて昨日照文の借用ある兩個の夥兵を使遣して俱君所へ
まわしける。介程清澄の殿臺を守らる。士卒と城の召取れ。那里に要る陣營の
毀れ神領を掃除せり。且乙接村の向弥七們及素藤の馳入る城内の良民と女婦と
出遣り。各家の還まると猛可の士卒と部者で是等の所要といそまふ。高宗逸友

頭人より。さきより窮民の賑給の美いりある。親兵衛懐へ清澄の勸めて施
す。清澄頭より。掉りてその美い思老も豫より心屬する。是れ亦番士と居れて重要
藤を追放の折這館山の城り。和殿より。城主のされ後亦番士と居れて重要
金あり。糧米より。皆是上の東西と。素藤が復叛ふ及び。他が掠奪をり。と
いま。死下知の依らむ。窮民と賑。其罪のま。死所の。親兵衛推返
き。晩生。横口の孺子と。徳の鳥許され。思ひ。不忠の似。抑歳。小豆凶
あり。困治。乱る。民の凍餓を救せ。是仁君の善政。開と奉る。吏人の自
禄。思ふ。民と意。事。行。與。分量。授。時。日。復。六。日。昔。昔。浦。か
做。和。漢。同。日。の。通。病。識。者。の。浩。嘆。在。這。城。附。の。米。錢。を。お。ん。下
知。依。ら。む。施。ま。の。か。も。あ。る。餘。都。て。素。藤。が。民。を。掠。め。積。東。西。今。を
も。散。ま。良。民。家。に。還。る。も。何。を。り。て。明。日。の。露。の。命。と。敷。糸。く。を。以。罪。を。

獨仁が上あらん願ふ賢老輒斷の危窮を救ふて上の仁政を普く民小知る玉
 へと詞を盡し諫め清澄言下小感服して遂小其議を儘し良干逸時景能
 當時城附の米穀金錢の多寡を問ひ勘辨あり倉庫より用餘財餘分の米
 穀をも賑給送令めせし阿弥七並良民們の天小慈び地小喜び擁護連てそかり
 中。舊所小安堵ありける然又親兵衛は是等の小音りらして憶む逗留三日及びて
 四月十五日あるめらけ小尚事の多くて退くことなかりし小日晡時の左側に向水五十
 三太と枝獨銚素吉の生拘の賊徒二十餘名と乾兒們を牽き俱小館出城小來て
 親兵衛並逸時景能小報る事小可毎小約束のどく船と那這の浦曲小歇て大江主
 等より一小時前の夜も今日までも這城類の落人の津と求る者よりければ欺て船小
 乗せて毆伏せ楯捕りし二十餘名いへの餘剛て小連くは矢場小海へ推階して
 殺しるものなりと小親兵衛逸時們は是の擗死を讚め勞りて清澄告る清澄

則雜兵們小生口毎受令し其本来責問者小他們の都願八盆作小隊
 兵中。年來虎狼の威を借りて良民を虐げたる暴惡分明りければ獄舎小
 敷きせけ然又清澄向水五十三太弟兄が日親兵衛們を送る事の趣ハ
 既小逸時景能少事小今又賊徒と生拘をまく牽りて献き任俠宜く賞與下
 とい五十三太素吉乾兒們小賞米五十苞合も言示して二十餘足の馬小馳
 その浦邊まで遣りける五十三太們の馳び拜して罷り坐せ折小親兵衛急小喚返して
 我ハ又投方小復汝達小船小乗りて昔路へ還んと欲を恩給の米ハも乾兒們が船小
 分ち載て毒家路か下遣りぬ汝達ハ船を歇て必小我とをなかととい五十三太素
 吉們の果てを退ける當下又親兵衛は孝嗣次團太と商量多し却清澄小
 別を告ぐ立上んといを清澄制を談きや御向もいといと和殿ハ是垣回も
 大功あり館の見参入れりて那地へとち放ち遣り且改木生の賊の頭人浅木礎



九郎と敷の補て素藤不索と撰る。その功和殿の亞あり。及次國大卿之も俱不是軍
功あり。和殿縮村へ伴ふてゆえ上る。重用あるべし。その功と思ひぬるま。とらと親兵衛らゆて
政本石電們がゆへも晩生只顧薦めか。も他們の七武士不先とて仕途不益多く欲せ
そのゆへも理りなれば姑且折をせん。且晩生の身比七武士と招會其仰を稟て縮村を
退かて逆旅不赴に不更不又妖賊對治の御教書と成下され。そのゆへ使蜚崎氏不料
むも西園河にて相逢ふとゆへに隨即征伐を先りて賊徒と討も夷けり。遮莫七大
士と招會の先命へゆへ果さぬ不并と照文與四郎不任せとある。仰のゆへ且御不口王書と
ゆへ。そのゆへとゆへ上る。そのゆへにねと仰まるとも七武士們と共侶不歸參へ我宿望入義兄弟
們不先とて恩賞とゆへ欲せぬ意不餘の七武士の必結城不來會とて。大法師の
菴在るべし。本月十六日の法會を今日より只一日と。途遙かて期不値とも。その路次
までも出迎へて君命を達す。妖賊既不對治せられて當城を異不民安ければ晩生茲不在

らむとも。賢光正正と在り。且諸勇士の羽翼をなれば事缺るもゆへ。とのゆへ。獲龍襲の
玉と合ふゆへ。清澄これを遮與して。その玉の後不又用をあらんとゆへ。政本楓の誨の
ゆへ。そのゆへをゆへ上る。ゆへに晩生へ一路兒們と俱に解纜といそぐべし。願の海客あわかと詞
急迫しく本意と舒く。住るべし。ゆへに清澄連の感嘆して。南愛死忠魂義
胆誰う九歳の童子といえ。然も不主意決り。今ゆへ不爭何せ七武士と相伴ふ。ゆへ
歸參し今より翁んのこと。忘る一霎時退いて却高宗逸友と共侶不來参。折乾金
十兩と寫したる。三裏と親兵衛子其薦めてゆへ。大江主あを落義義を。老拙が餞別
る。ゆへに三裏の大全氏と石電屋へ贈る。欲ま和殿のゆへ。那人々の戦功稻城へゆへ。ゆへ
賞禄莫大をゆへ。死下知と。當下親兵衛へ三裏と曲不受戴。ゆへに
友のその三裏と推找めて。俱不別を惜む。ゆへに當下親兵衛へ三裏と曲不受戴。ゆへに
裏と推返して。清澄が答る。美情辱くゆへ。晩生のゆへ。比稻村より首途の折上の

賜り一萬金あり。路費匿くもひつゞはるの終預けまらん。但一太全と次園太を浮浪の身も義士でいへばを輒く受へた然とくは返へ返へ長者の好意を破るふ似たり。因て晩生收め措て折をりて傳達まへ。去向をいそひへ餘談を異日歸參の折の折びも聲申へん身の暇もあつねといと遠く心多る件の十金三裏を懐小夾め退て程よは処お考へる。考嗣次園太卿云よと告げ伴ふ立去んとせ。程よ清澄高宗逸友の趕携りて袂を掖る。いそは理りなれども留別の不意を候まらざると薦めんと欲せし一重時住りの愛か。と云原逸時景能も共侶小走來て浦邊の船まを送んとて前小立後小携りて放るべもあはりし。親兵衛聽き頭と掉りて平安を異の折るら柳と執ね水と洗ひ送りの受をも致さ妖賊傳囚ふるやゆふとも錢燼のまご冷る。願ふ各宿老を幫助て當郡と理め私情今今之急務あはらま。と論して宅も從の卒とまら小孝嗣們小目と注し袖と拂ひて飄然とて出ま。程よ考嗣次園太

卿云の邊へ清澄們別れの礼を盡も果ぞと外面小立出て後れとを親兵衛と趕々俱に從ふる。古最酷う急迫し。清澄並諸士們徒呆然と目送りけ。愆而大江親兵衛の考嗣次園太師弟とわて。館山の城とまて浦邊と投る。いそ程よ長は肆月の日甘香果て望月の影隈もるけれ磯山傳ひ迷ひもせを既小と船まの五町許もあるとと思程よ素も吉が蕉火と振照し迎ふ來る逢ひあり。時素も吉の伏家の船三艘恩給の米を分ち載て剛才か下遣と告てそが依先小立て故の浦曲は案内をま大家他と勞ひて。路次をいそが。夜酒半刻の左側小舟一船小乗しけり。船中五十三太が心と用ひ夕饌の設あり。介程よ五十三太は今戸火盤柴折り焼は乾兒の富士と給事小達して親兵衛以下の客人小飯を差。五十三太答て然は江戸より結城へ十六里あり。その浦より西園河まで既小知せぬがとて

一夜まよと到るべ。遮莫兩國河も還りての迂遠くそ路も損む。因て行徳浦へ赴
 けり。荒河を溯り関宿より陸路と走ら結城まで八里。荒河を漕入れ船の找むと
 遅く候べし。有敷糸の覚るやあわねば。這八個の者母が腕の涯り拵て明日亭午の
 下總より関宿へ漕着てん。最も日長は時候る。陸地とをせむひ。結城へ到着疑
 ひる。とよ親兵衛執つてその説をき。然るにそげとの隨小笠高工のてを。艦を
 建列せ。その通宵漕せり。果して十六日の曉天。行徳の浦へ来り。越お姑且船を
 歇て管工の早飯を炊せ。登時親兵衛の孝嗣と次國太。清澄の立意を傳
 へ。贈れる金三裏と命を分ち薦めての事。金の少ふあれども。窮民賑給の
 東西あり。又我君の賜あり。只那翁が各餞別とられ。そを那折告知。必や
 推辭せん。然る言數多くて人の志の空ある。思ふよりて預る置ぬ。唐山前
 漢の韓信の身負かり。時漂母の食を受る。い世俗もよく知る。金の本

意ふわ。と。漂母の飯勝。願ひの收り。明日の路費。用ひあり。と諭す。我
 孝嗣も。聴て。そを思ひ。我。和殿の從。附驥の小功。あり。國主の忠。盡
 す。又荒川翁の與。も。只義の一字。思を。和殿の幫助。多。那翁
 より贈ら。東西あり。受。和殿の意。猜。受て。我。贈。則。和
 殿の財物。も。推辭。辱。心。備。孝嗣。か。の。次
 國太も。亦。辭。演。受。戴。俱。金。收。倍。而。早。飯。果。五。三。太
 素。吉。高。工。母。亦。復。船。走。荒。河。漕。入。現。潮。船。勢。始。の。こ。る
 ら。遮。莫。伏。姫。神。の。冥。助。也。思。い。早。午。の。時。一。関。宿。の。遠。小
 来。不。親。兵。衛。の。勒。肚。圓。金。十。兩。合。出。て。五。三。太。素。も。吉。高。工。の。や。う。
 ち。瑣。細。る。東。西。多。折。周。合。意。這。回。和。郎。們。が。幫。助。ふ。思。ひ。隨。る。幸。ひ
 多。り。その。折。の。寸。志。も。異。日。船。路。と。安。房。妻。逸。時。們。を。訪。ひ。其。折。我。も。再。會。せ。ん。

尚又用るとあり必館へ曳上て恩賞の功不依らま。いせ袂を分た。とふ五十二太
 素多言の乾兒們も皆額衝兼方。その中五十三天の金のうち戴はく。噫慚愧
 館山で昨早下されぬ米意意外過分の造化るふ今又倍る宛金を受まると本意
 るね船の乾兒們は漕かして小可と素多言の結城へ宛伴仕るんと親兵衛等
 へぞ否水行を汝達の幫助のよそ便宜とされ陸地の伴の決して要る。口誑の時の程り
 やせん大義かそと勞ひて刀を引提て身と起せ考嗣次固太卿も亦五十三天の別を
 告て俱船より出てもと禁め難る五十二天素多言の乾兒も齊一目送りて徐船を
 返りけ。話分両頭介程の館山の城内の親兵衛們が結城へと立去りて幾程もる
 鮫内兼四郎詰茂嘉福并の親兵衛が使价の連る。兩個の親兵と稲村よりか
 来て隨即荒川清澄は下知状一通と三家老連署の奉翰と遞與て首尾を告ふ
 け。是より清澄は有功の諸士と聚合て俱あふ書と披見るふ第一條中も大江親

兵衛が大功と讃さるひて七武士招會の使。照文與四郎も親兵衛の清澄們と
 共居稲村へかゝる参る。尚性急を立去る意の儘して軒をくぐりて是より
 下下の三四條の夷瀆の洞民賑給の事又館山の城の森高宗田税逸友の番士の
 頭人として士卒五百名と留て守らるる。又清澄の友勝良干景能と共素藤藤以
 下生物の兇黨を牽て徐凱陣矣。但一礪時願八平田張金作與利本膳與利
 狼之介の外稲村(牽)を誅せ死者のこれを誅。追放らるる者追放らるる民の煩ひる
 らるる。清水磯九郎仙田麻嘉六の外首級も右同断を察す。とありければ清澄即使
 高宗逸友們と兵の詮議しく。次日賊徒の兇暴を誅戮する。餘鳥合の難兵の罪
 輕に追放しけり有徳程の素藤が暴虐堪難隣郡走りて夷瀆の言置豪
 民の漸々多る。又那梶野葉門の諏訪兩社八幡の神主も稲村より来て各職
 就た。夷瀆の浦波静也館の山風枝と鳴ま。郡民安堵あり。五七日と歷る。

清澄の更に入馬を救正く友勝良干逸時景能們と共に稲村へ凱陣去然も素藤空
宗徒の兇賊を檻車より無旗又羅小昇して真先小れを牽せける勢は奇めりけれ
巷街へ人の山成として觀る者処々充滿す信而決の目清澄們の稲村へ歸城して義
成朝臣不見參し大江親兵衛が大功の事の趣妙政本孝嗣石龜屋次團大師弟
向水五十三大弟兄の事及孝嗣の舊縁ゆゑ政本親が忠告の事の顛末又荒磯南弥
六が弟阿弥七その二男増松の事及南弥六が首塚の事又親兵衛が靈王の城の地道の
石壁の兵火守屋の柱倒れて獄舎の籠子と摧た友勝良干へ出るとして本膳盆
作と虜をける為体又親兵衛が仁の守の靈王の御宗大母妙真許罷出で船に乗る
思の折忽然と蜚返り来て親兵衛が懐に入りし又照文の兩國河原を料親兵衛小
逢ふるとして御書と遊樂仰と信く那身の結城へ赴けし事又親兵衛の自餘の七犬士を
相迎へて共侶なるまゝをんとて葉四郎們が還るを告ぐ十五日の下晡孝嗣次團大師弟を

俱して水行と下總へ赴けし心標眼前見しゆりて後ゆける事をもとの崖畧とす上は妙
椿狸の奇は皮と雉尾龍の玉とをせまるとして這狸兒の箇様々を昔年龍田の近郊を
八房の天と子養ける事の始より玉梓が餘怨那身の眞縁も當家出宗と做し居りし
政本親が親兵衛小告ると奇談の顛末開も靈王の威徳ゆゑ玉梓が餘怨解脫して
妙椿狸の即死をけるも亡骸の毛の中か如是畜生發菩提心の八字見れし事見たり先か
政本親の上野の原を狐龍化して升天の奇特も漏れまると告宣まると義成主の事
毎か驚馬奇感嘆大々言ひ身邊もゆる三家老近習も俱く倒聞して駭嘆せむとの事
耳新多を思ひけし且して義成主の清澄不宣やう妖怪賊徒一時小亡びて當家土奈此
泰然に至る則大江親兵衛が神の眞助と云ふも亦敵と厭まると覺の一字を
守るふあゝと云く士卒と損れたる全勝と云ふも龍田のありて條々又詳か宣上
大然と云く先友勝良干逸時景能們を召しと見参りて饒一更を

杉倉氏元奉りて即便仰せ給へり。武士者時運よき勢ひ竟不究りて敵の為不擒お
 れる恥お似て恥あはれ。浦安牛之助友勝登桐山八郎良千八神火の真助獄
 舎と名ある賊徒を生拘りて會秘言の恥と雪め一事尤奇特と思召ま宣本領成
 安堵也。又田税戸賀九郎逸時若屋八郎景能の城を奪て命を免れ罪を他擲避
 たる。饒されたる越度あるも今番大江親兵衛の從て多く敵城に入て火を放ち且仙麻嘉
 六を相殺しあはせり。又その前夜西國河より親兵衛の送る番折平天們と相計り快
 船とて東の面を敵地より近るも傳信親兵衛が主書不達を以て恩免を請まふ依り
 則この忠戦を以て那先非を償ひ給ひ了。館山の城の頭人を罷りてその餘は舊の辰岡
 は清澄に従て瀧田まおぞ。老侯の死を哀しむ。仰渡さるる友勝良千逸時
 景能のかそく恩命を拜して退りおけり。小程お荒川清澄のまも私宅とてその件を四
 士と伴て馬を早め瀧田詣て義実朝臣見参。大江親兵衛が天功素藤們伏

誅都々稻村殿おぼえ上る件々一事も漏さず告稟し。妙椿狸の奇は度と癩癩の玉の
 由来を解て憲覽お備へ。義実主の歎いと又驚鳥は太さる。王と皮とを亦内て原來那妖
 尼の昔八房の天と子類ける。富山の牝狸であはる。那折我の尚壯年也。件の犬と愛るはむら
 裡の字は大小從ひ里を後下りおれ。ある里見の犬を以て前非あり。と賢達て戯語と思ひけれ
 悔し。恥に批言是不疎。幽るは狸の古字の多。小從ひ後の事也。今も猶通
 用也。況玉梓が餘怨賞録りて當家子崇と做去。神を身身の知り。亦我口の
 過ぎるはま今玉梓が。餘怨解脱の折を以て狸見の共。命終り。その亡骸の毛の中。小經
 文の偈句見れ。正。是親兵衛が持る靈玉の奇特也。畢竟役優婆塞の方便利
 益をんと。狐龍の忠告違ふ。然。洲崎の巖室代香の使者。又這
 妙椿狸の皮の逢坂の関のある。采花物語の卷。小ある。那関寺の半佛の例もあれ。
 華幔。為。大山寺へ寄捨せ。兒後方おゆる。小湊目と鮎船貝六郎を

召近つて。恁々と吩咐て度と目小預多の両個の近習ある結果て遠く退出ける。
 現老候の仁心る仇は報ふ徳とてあや。玉梓並妙椿裡の甘露提を吊る玉
 あり世有る賢君とて。清澄特も感服とて却友勝良干逸時景能の稻村殿の
 仰ふより。まありしより。さへ上れば義実王點頭を以て。馳々件の者毎も身邊近く召
 よせ。今番の軍功と讃めよ。御高威の虜おせられ。城と以て落るる其頭の事ハ
 向ふも但論のあや。若達も悪もあを竟功績の愛さぬ神の擁護と大江仁が帮
 助ありしより。さへもあねも神佛と号し思ひなかり親兵衛を総角とて必る
 侮りも若達年歳を増りも考えられ才幹の及ぶを思ひ。志と励し。仁の劣らと勉よ
 か。一犬士の這里不在るも。妖賊都て俘囚する異日八犬具足して俱小安房殿
 佐ける必し。関より東の八ヶ國敵るる。意ふ件の犬士門の安房殿の寶目とせん。
 他們が所藏の靈玉と又何を異る。今番仁の上總より。結城赴て。えん七犬士門を

伴走必し。我の犬士と企て。既久く。宣ひ。呵々。若
 達軍旅の疲勞もあや。老の詩言益る。能の心と。難産龍の玉と清澄の
 返して暇とあひ。友勝良干。父の申す。逸時と景能の存一唯々と。兼る。昔の汗の
 流る。覺て。額小席蓐の跡印も。思は。退出ける。是より。絶小一両日。麻止。稻村の
 城内。素藤藤們を誅戮の沙汰あり。浦安牛助友勝登桐山八良干。實檢使と奉
 で。雜兵一百名と從へ。素藤並願八盆作本膳狼之介們を長須賀。申明亭小
 首級を。俱小鼻首せられ。これを觀る者堵の。肩と比。袖と列ね。日毎。向斷
 る。けり。その詰朝義成主の正廳小。四家老。第一の功臣。大江親兵衛と
 折清澄高宗逸友們的餘も有功の士卒。第一の功臣。大江親兵衛と
 結城へ。這里在。ね。目今。賞と。由る。他と。閣。賞。禄。と。を。本と

垂て末を合するの。有はれ親兵衛が帰城の折を姑且沙汰及ぶる。其の美徳
 かく御示しね但忽諸おまをる。夷瀾の民の艱難。他們の年来素藤主僕の奢
 侈淫樂の為お責合されて貧は子と賣り妻と鬻南に富る財宝子女妻妾を奪
 まりより。身分鏡の全うあるも。御小清澄の館山中。大江親兵衛が薦めら
 那裏の民お賑給とゆひ。然とゆれ。然なるも。秋實をを支る不足。あらん因て夷
 瀾一郡の税斂と三稔免去。下知を高宗逸友の傳よか。と仰され。四家老們を
 美欽ひ。後のごふ必ひけり。是も功ある士卒の理義と感。恩賞成望。夷
 瀾の民の枯。苗の甘雨。あふ秋ひ。三稔の長記を。及七年より常の如く。献
 んとを願ひける。然安房上總のかの如く。善政愛さなければ。結城の安危。い
 え。大法師が宿願の法蓮那里。成就。八犬集會。あや不や。分教あり
 昔年開手結城城。秋月春花。幾十。夏白妙の木綿城の庵。雪る。年歴て

むま。垣のうは花。の詩歌の意と。知ま。欲せ。且下回。鮮分。を聴ね。か。

第百十回 小乗樓の一僕故主小謁ま 大庵小十僧法筵と資く

話表。姥雪與四郎。四月十日の。曠昏。一個の伴當。後。照文們と共。侶。小稻
 村の城。四能。出。折。近。近。港。口。より。船。お。乗。り。下。總。の。市。川。へ。と。て。連。り。小。水。路。を。い。そ。死
 木更津。の。夜。猛。可。風。波。暴。れ。て。幾。番。と。り。吹。戻。され。十二。日。の。曉。方。小。卒。あ。て。上。總。を。
 宜。と。い。ひ。船。と。遣。る。日。易。く。て。ん。開。と。愁。み。惴。り。あり。弓。と。強。る。壁。言。漏。れ。徒。小
 だ。小。復。ら。船。と。遣。る。日。易。く。て。ん。開。と。愁。み。惴。り。あり。弓。と。強。る。壁。言。漏。れ。徒。小
 五。六。宿。の。日。數。と。費。い。る。ん。尚。一。霎。時。等。ぬ。ね。と。諫。る。言。の。理。り。る。日。と。ま。不
 消。去。一。小。船。一。個。の。伴。當。の。昨。夜。通。宵。狂。風。逆。波。の。揺。惱。され。り。よ。り。苦。と。被。死。病

中。巫の役者達もあつて。左右も程の黄昏時候より。漸く風軟んで且追風
 するんときも。與四郎が伴當の心地死んで覚ると。飯の準備の茶と薦ら
 しても甲斐な近果敢々々飲さなければ。得陸の杖登して。這津の客店に留
 め。將息させて下總へ行く。高工們が還る比も。他が病着稍瘥る。稻村へ送
 かせと。店小二の保を委ねて。又與四郎の邊へ。船に乗る程。既にして日の暮る
 くて。而る中。の時候より。風いよく宜しき。高工們の船と漕出。市川を投て
 走らる程。十三日の朝。船果て。這里欲と思ふ市川。大江屋の河岸。来りし。與四
 郎。高工們を労ひ。那伴當の事。も。あつた。舟裏。自ら提。船より
 出れば。高工們の。終漕戻して。安房を投て。程。當晩。又上總。る。水更津。の
 船。よせて。高工。二兩名。陸に登り。那客店。に赴け。與四郎。が。留め。置。る。伴當。の
 安否。を。訪。ふ。巫。の。瘥。り。果。て。も。あ。つ。た。然。れ。ど。幾。ま。も。休。て。あ。る。不。あ。つ。た。駈。り。て

出。船。載。よ。安房。へ。還。り。と。の。よ。り。杖。け。て。船。を。載。て。次。の。日。の。曉。天。の。安房。の
 宿。所。に。歸。着。る。隨。即。稻村。の。城。へ。と。告。ぐ。伴。の。病。人。を。城。内。へ。返。し。け。り。是。の。よ。り
 與。四郎。の。風。波。の。障。り。あり。とい。へ。も。恙。も。な。く。て。市川。へ。昨。日。着。到。る。よ。り。稻村。の。城。へ
 告。え。け。り。然。れ。ど。伴。當。の。約。莫。一。句。許。中。稍。起。出。る。と。い。ふ。時。日。通。し。麻。呂。け
 ま。り。又。與。四郎。が。迹。を。追。ふ。下。總。へ。も。あ。つ。た。有。司。們。も。亦。與。四郎。が。幾。ま。も。市
 川。に。在。る。べ。し。收。伴。當。を。又。那。里。へ。と。遣。ま。し。も。益。々。と。推。量。り。始。り。と。し。て。そ。の
 議。及。び。只。瀧。田。の。音。音。們。の。水路。の。障。り。も。恙。も。な。く。と。與。四郎。が。上。箇。様。々。と。具。の
 事。を。知。せ。し。音。音。鬼。の。單。節。們。の。敬。馬。等。且。歎。ひ。て。日。數。程。経。ぬ。旅。を。市川。の。り
 の。ち。正。に。後。の。事。は。ま。は。り。還。る。日。を。待。て。ぐ。を。思。ひ。け。り。問。話。休。題。介。程。に。與。四郎。を。那。日
 依。依。が。宿。所。に。赴。け。り。姓。名。を。告。ぐ。對。面。を。請。ひ。折。り。東。人。依。依。の。荷。船。の。上。乗
 ち。て。江。戸。へ。赴。け。女。房。水。漕。の。香。華。院。へ。基。參。ま。り。と。留。守。の。耳。の。と。疎。る。薪

炊の老媪のそとて。笠高工。一個も在ざりければ。何を問ふても外々。已がらふもの。さるまじく。與四郎の親兵衛の這里。來ぬや。不忌と目今知る由も。て心頻り。小焦燥。とも東人の妻の還りあるまで。等より外。術も。と尋思と。考へん。其首。漫りて。復て。そ來ぬと。期と推。退れて。その御の神社。佛閣を。捧んと。欲する。不差。る都會の地。あ。ね。ば。火場。古迹の。親る。ば。も。一。只。戎番。大江屋の。門邊。と。過りて。觀入る。小老媪の。そ。と。寂。寞。さ。う。左。右。も。程。小。亭。午。の。時。亦。復。た。て。問。ふ。依。介。が。妻。水。澆。の。方。纒。歸。宅。の。折。る。れ。ば。遠。く。出。迎。へ。て。先。與。四。郎。と。客。房。へ。請。登。一。名。對。面。て。茶。と。看。め。る。と。あ。る。管。待。特。の。法。り。と。六。松。富。山。は。親。兵。衛。と。衛。子。れ。値。遇。の。縁。定。る。隨。の。ひ。出。く。その。飲。び。を。演。る。程。依。介。も。亦。か。へ。る。考。思。ひ。ける。定。實。客。と。與。四。郎。と。等。より。船。の。揚。荷。を。笠。高。工。們。に。任。し。て。衣。脱。更。く。對。面。を。送。の。口。誼。果。る。定。然。び。い。ふ。も。あ。ら。け。り。登。時。又。與。四。郎。の。東。人。丈。婦。も。ち。向。ひ。く。今。番。稻。村。殿。

仰。より。照。文。と。共。侶。の。親。兵。衛。と。召。復。さ。る。死。を。使。を。奉。り。送。ら。去。向。を。異。ふ。と。水。路。と。あ。る。索。來。ぬ。事。の。端。より。風。波。の。障。り。不。遲。滯。の。支。去。の。地。の。親。兵。衛。が。舊。里。を。立。寄。り。て。も。あ。ら。ん。歎。と。思。ひ。量。り。事。の。情。と。云。と。告。知。を。依。介。も。亦。親。兵。衛。が。晝。裏。あ。の。地。か。り。來。て。數。日。逗。留。の。趣。且。昨。の。朝。未。明。の。辭。と。當。所。を。立。去。り。隄。地。の。結。城。の。大。茶。弁。と。訪。り。必。七。大。士。の。逢。ふ。の。あ。ら。ん。と。去。向。成。い。そ。だ。の。ま。ま。も。報。れ。ば。與。四。郎。歎。び。く。考。へ。ん。便。宜。と。思。ひ。恨。の。所。の。我。船。の。始。り。順。風。を。浴。て。昨。日。早。旦。あ。の。地。の。來。の。對。面。輒。々。と。り。一。期。の。値。さ。る。を。悔。し。け。れ。非。如。結。城。の。七。大。士。の。采。會。せ。る。と。あ。ら。ん。と。大。江。の。和。子。の。十。六。日。ま。だ。那。里。に。在。ら。ん。と。疑。ひ。る。既。に。去。向。を。知。り。考。へ。ん。あ。の。長。坐。の。益。を。今。より。結。城。へ。赴。く。と。の。依。介。推。禁。め。る。と。又。酷。く。性。急。と。今。日。の。中。の。三。日。は。な。し。明日。朝。立。た。ぬ。と。十五。日。あ。の。と。ん。ど。く。那。里。へ。到。り。ぬ。と。ん。定。ぬ。と。定。實。客。と。只。の。終。に。還。ら。ん。と。和。子。も。知。れ。ぬ。争。何。の。

せん風波水路の疲勞もあらん枉て一宿留りせぬとの間水渡が準備の候を
りく来て推居。時分既お過たる物欲くくそとらまうと疎飯おゆれと先箸と
令せぬと給侍も中酒の盃餚さへ竹筴魚の塩炙竹筍の苗小稱も與と妙を
摘。徳食心の丁寧ゆるの届たる手長蝦然し魚米不富さ御の貝の柱初胡
瓜那這株。甚分る命と昔西の新茄子根芋のいもご子のあぬ夫婦右より左
より屢羞めく已まの人の好意お與四郎の今ゆる推辭むとゆき言下り話説
も長うりて伏姫神の冥助靈驗親兵衛が世傳も文武の才学大功の支の趣
又孫等が音音がの曳子單節がゆさへ身の幸い富山の神と君との恩恵
を。有來一方説誇も依介水渡の親兵衛が這里旅宿の事の顛末又妙
真が上りもいも出听もあつ百多日銷一長も思の取まよ時程りて黄昏近く
り。與四郎只得意見不儘て明日と契りて去向をいそむ先結城への便

路と向ふ依介竹合てこの地方より那里へ七八里のけん井と船を関宿まで利
根河を溯らふ足を勞むとて倒れ近き小可送りまわらせん任用のいねとふ
與四郎然び美々。今宵のあお明一けり徳而次の日の曉天の依介の管高工両三名と
喚覚し出船の準備と做を程水渡の亦與四郎早飯と羞めると是より
先の與四郎の臥房を出漱。身装も家廟と向ふ。房八沼蒲が水玉朝
ひ。一垂時廻向をある折昨々準備の金壹兩を分ちて二裏もあつり。情地不賤
贈て退けり事情と原る。與四郎が肚裏も東人夫婦の好意と感して昨日よ
で今朝も酒飯の管待大さる。刺船りて遙々と関宿まで送る。報ひを
做さへいもまんや然りと。銭財の那人決して受が。今番の猛可の旅。送
裏不せん東西も。要る。尋思とある。賻贈の一事两用を。件の金を
措か。その折水渡の心も。程経て肇て見出ける裏不寫せる姓名も。疑ふ



丁九

八代傳九郎



八代傳九郎

依介水
行
與四郎
送る

へくもあつた心單に感して已まざる當晩良人の還ると告るを依介も
 亦與四郎が大なる誠心を只顧感佩をよけるは是後の話余程與四郎の
 へそく水邊別を告て依介が儲の船から乗る折に尚暗けれと兩個の篙工も依介
 も力と勤し漕ぐ程に月落て鴉の啼ねが明きて天のこぼ河不瀬りもく船を
 三挺舟の十町あまりのやまぬらんと思ひ比東をゆくもそけり憊而る目の下瞞ふ
 船の関宿に果しと與四郎の依介の船と演相別れ獨陸地をいそめつた
 一里許なくと照燭時候より今宵の堺の驛の客店に杖を駐めて明るを遅
 くと立ち出で連りの路次といそぐる結城まで七里身は老れども尚健歩の運の
 撓るる。その日未牌の左側結城の城下におまよければ、大法師の草庵と里人們の尋
 問ふお知りといふ者ありとく且訝り且問ひ、最長なる城の町をまよ不誤てと程お
 忽地後方お人ありて開け焼雪主とていさまを住りぬ後、咄々と聲高きお喚被

依介と與四郎急にお互に是則別人を豫面善れ照文が今回の伴當と云
 與四郎心欲びと遠く菅笠を脱て引提の管程もく那僕も走着て小腰を
 折めせ元然お與四郎お告るも主とて十一郎の這城の町を客店に在り老爺は
 過らぬとてお喚まわすせんとおれりお迎におまわり先にお喜ぶとて
 便宜お與四郎の車もろろと旁にて仔細と越え向ふ及ぶ案内儘して菅路へ立
 復ると一町許照文が宿とせ客店におまよ来てお尋ね店のお白壁にお乗屋を寫
 たる燈籠の一座棟へ懸而與四郎の草鞋を脱捨脚を濯ぎて引提店の傍より
 軀を擡擡おら登れ照文の這果在り宿の御嬢が汲りて來ぬと茶を與四郎に薦
 める外にお同宿の客もき次の間にお照文が野兵伴當のまを居させ登時與四
 郎の合笑るが照文おうち向ひく最早より登崎主在下の首途の折那船も兼
 せりも幾程もき風波暴れて既にお危窮及びて鏡も免れて上總の水更津の船

歌留次の日那港口に在り。只一個の伴當の病臥すと陸に登りて其頭の客
 店に留り順風と多て十二日の朝市河を大江屋に赴きて依介夫婦と對面す。親
 兵衛主の姓方も知れ那人の數日那里に在り。結城の法會の值んも十二日の朝未
 明に去去と報られ長談會話の時移りて東人夫婦が留められ只得那里に止
 宿あり昨日の船より依介高工們の閑宿を送られ昨夜の塚の客店に明し七
 里と走一走の未牌の時候は這城の下に來ぬもの來れども、大法師の菴を知らざる
 索難く氣に脚さへ疲勞すまで困りて是れ憶の由りて見身あてられて喚れり
 這便宜にんや見身の又後同の地を來ぬもの、大道徳の逢ふ一鉄大士を
 來會せられ鉄と同を照文推禁めて然りと且听せ我も亦往る十一日の夜女より
 勁風劇波が漂されて船の找まらぬ危きなりと辛き十二日下晡武藏下總の封疆
 なる而國河に漕入れ風波が心地と損れ我身安らげり。那河原を船公の坐

席を借て臥す存り。その宵料らも大江仁相逢ふこととて隨即館の御説を
 傳へ御教書と渡與し此を故に固様々々佳々の時宜けり。親兵衛が一路人
 河鯉佐太郎孝嗣が事及靈狐政木が事並に孝嗣が改名の心操又石亀屋次郎大
 と升が角触の弟子卿三が事又那河原の使者とせし。向水五十二天弟兄並に田税
 とかくらうとせし。とまのちちらうとせし。いささかごうまよとす。とす
 戸賀九郎逆時と苦屋八郎景能が五十二天許寓居の事都てその日の吉の顛末一事
 も漏さず解示して却親兵衛の是等の便宜に快素藤と對治せんも。十二日の曉天又
 逆時景能孝嗣次郎大卿と照文が親兵衛十名の内中才の兩個を借從へて那
 五十二天素素と吉の準備の船に乗りて上總に投て漕走し。一橋事の光景
 今見る像くも做とせ。耳に生れが與四郎所々笑局に入て奇也とらと感嘆を
 登時照文又の事。然ら咱們的大江の船出と河原を自送り果しより更に去向のいそ
 るれ疾立去ま欲するもの。宿の船公高工奴婢們の前夜の息劇が駭怕とら

那地あるに在る者もければ丹之辭せむと慌しく出でぬるに人の馬留守とて
憶むも天と明し程小船公夫婦奴婢們まで那里より秋出て来る朝の炊火又時程りて
日ほど日印を升りし時候稍早飯も果たる程兵と伴當們を以て却船公を別を
告大江並一路人們の房錢までも送る還して千住の方へおたす豫北の御
士とせり水垣夏約許立ると七個の武士の御を思ひ申斐るく不知樂内の跡に
十町許の過り始て人同せよとて過り後とて悔し思へ且試し伴當を走
りて下りせせんとて咱們と以下の兵毎路備る茶店小徳ひて在り心利を伴の若
黨直塚紀二六と喚做る小意衷と示し使と課て水垣許遣しける小徳といふ平响
るふ紀二六をさるる来て那里の動靜を報る事小可那御士許赴てん使のより
言示那七個の武士達の今も逗留さるやと問試し不知樂と答て左右を事の實を報
べらもあつたれば小可猜して毫も礙議せむ則里見の御内入る番崎主の使るよりと

詳小解示きく那毎の疑ひ釋けん水垣の家は老僕も下世智衆と歎喚做る
玄関より出て小可より向ひ情を報る事番崎主の御姓名の豫知のひひ隠
まづもひのぞ尋め七武士の春より久くあゝ逗留して在りしが結城を居、大庵の
法會のいで値んとて今朝早天四月十五より立去りて那地へ赴給ひ折折と東人
残云の猛可中風の大病也半身不遂のひ餘之七も那人々と俱に結城へゆくこと
ゆるる只小生們一兩名大士達と一里あまの送りて方僅還る事と云ふ紀二六あり
ゆて開胸苦し御病厄早の平愈と祈りしを昭文の君命也伴の法會代伴の
去向といそ旅されしより御安危と問まわす事にも克んがまふ大士達と俱に必
訪ひまらふもの宜く稟しぬ却大庵の結城也那方お名も同し世智衆然
ひの比小生の大士の使を兼りて那草庵へ詣かも故ありて大道德の面談の仕
らる本意をかりたれば事朦朧に似るものる伴の庵の城下にあつた乾浄なる

茂林中の締掛る柴門を那精舎の知る者稀るれ、素難きを
あらん遮莫城下より西の約莫十町許あり、只那嘉吉の古戦場と聞せある
紛れあらずと云ふ紀三六の果て走りかゝる、憊々として咱們報へ亦復言
便宜と云ふ。憊て這夜の糟壁る客店不明く、次の日早旦宿して連り路
次と云ふ程、晴時の比及ふ、あつちの地未だ着く、件の嘉吉の古戦場を人々向
るふ紛れもあらず、既中と誨れる茂林頭、未だ身程、料を一個の法師に遇ゆ因て
我又その法師は、大庵と問試、法師答て开は這里より遠くもあらず、樹枝
深けれ迷ひぬん愚僧も那里へゆく、這方へ来ませと先立て導く、三町許
果して樹枝の間ある処、締る草の葎あつちの登時法師の咱們をさへ、素あるふ
大庵の則、這里で休む、そのあつちの咱們の歩を早めて、我と近づき、飲ひを演る、法師の
あつち、躡く樹枝陰に入ると、あつちの忽地、えまをさる、あつちの、憊而咱們の紀三六、呼門

縁頬の障子の用、此のあり坐席の才、九尺、過ぎ前、六尺許
る佛壇の笈佛ある、中央一個の地炕、用いて席薦五枚、布儲け庵主を佛
壇の邊、端坐し、大塚、大山大川、大坂、大田、大飼、大村の七賢士、面識する、中識
るも左右二側、坐して在る、閑談園を、以て飲俱、咱們をさへ、さへ、珍しと
むる、小片寄て席を譲られ、登時咱們も、圍坐入り、大川、大坂、大村、の初對面
口誼互疎る、又犬田、大飼、いれ之、就中、大塚、大山大石、木以来、恙る、再會
祝し、祝され、却今番、當精舎の法會、就瀧田、稻村、両館の御代、香を仰付、参
向の事の顛末、瀧田の老候、年来の御本意、稱つ、その見、飲ひの趣と、大法師、は、連
去供類の時、日と問、さう、公私の話、説く及、びける、王客の喜悦、さうも、あつち、程、七、大
士、大坂、大山の復讐の事、及水垣、残三、夏、仍、落、船、餘之、七、有、種、の、素、生、義、使、の
事の趣、又河鯉、守如、子、孝、嗣、の、事、亦、賊、婦、船、虫、媪、内、が、事、善、悪、成、敗、箇、様、を、

依々ふゆゑとて。崖略と解示されて、大法師と共侶別後の動静と問れり。咄
門則大江の奇談。那人富山老侯の危難と極なり。その事の始より伏姫神の眞
助靈驗和殿夫婦兩個の娘。婦達再生の天助善報。兩個の孫。出生の奇異。洪福又
那神餘滿呂安西出。東介復五郎九。西郎南弥六。隊八們が帰服の事。兩館の仁
政四家老の良佐。言の素藤が叛逆。義通君の窮死。妖尼妙椿が幻術。小至りまで都て
大江が智勇大功臣。得失素藤と恩赦。並に再叛の爲体。且妙椿が幻術。親兵
衛と遠離る。反間の事の趣。清澄討の大将を奉りて。館山の城と攻伐。とも全功の
だわさる事。又友勝良干。逆時景能。浮沈の事。南弥六。東介が戦死。濱路姫の
二度の厄難と。姫神擁護の示現。小の館の疑ひ解させ。あてて。各親兵衛を召か
且七個の武士の在処を索して。来て。東と和殿と。咄門の招會の死使と命せ。れ。自他の
去向と異ふ。と。水路をい。た。一。事の崖略。約是までの數箇條。既和殿の知る如く

一事も漏さず告知し。さて又咄門の兩河原を。大江が逢ひける。その宵の首尾。孝嗣。次園
大卿云。事靈狐。政木が奇特の忠告。又向水五十三太素。も吉逆。時景能。們的。栗屋。箇
様々々。憊々と解示。大江へ素藤。誅伐の御教書。賜て。孝嗣。並に。次園。大卿。云。逆
時景能。們を相伴。ひて。その。曉。天。小。五。十三。太。素。も。吉。逆。時。景。能。們。の。栗。屋。箇
漕走。る。る。別。路。の。終。末。言。詳。告。を。庵。主。へ。七。個。の。大。士。に。く。駭。嘆。と。感
佩。せ。る。の。の。大。江。上。和。殿。們。の。事。死。中。生。の。の。伏。姫。上。の。神。恩。冥。心。我。君。御
父子の賢明武徳。又今。ち。く。く。仰。ぐ。欽。び。あ。ま。り。て。感。涙。の。技。む。と。孰。も。覚。ぬ。を。不。歎。唱
涯。り。る。り。け。り。當。下。咄。門。の。大。法。師。兩。館。の。御。談。は。且。七。個。の。伏。姫。御。教。書。を。處
與。下。小。は。れ。六。大。士。們。俱。不。受。載。せ。り。在。下。們。の。年。來。貴。命。を。辭。ひ。な。り。一。時。至。る。故
る。り。凡。宿。因。齊。一。義。兄。弟。の。も。良。足。せ。れ。ば。死。を。承。ふ。春。不。至。り。て。大。阪。毛。野。逢。逢。と。を
治。て。七。名。を。聚。令。か。も。獨。大。江。親。兵。衛。が。存。亡。死。活。を。知。り。り。な。れ。世。不。慨。一。は。涯。り。る

夫豈料んや那神童伏姫神の真助や。世四郎音音を娘们さ皆他所守
 傳ふ六稔富山養心術身長大入備らうのそまを君侯御父子仕へま
 して莫大の功ありんと思ひけるは柄我七名六稔以来百折千磨の窮厄艱苦
 凌犯て恙多り一皆姫神の真助やと感激の外けなきまれば方まのそまを
 介の功ありて孰九歳の總角を親兵衛恥ざらんや。開明君の垂末を今又御書と
 賜りて招きぬ六倒の面目似て面伏之親美當忠忍仕ぬと異口同様に陪話と咱
 們听々尉めそ然る宣ひそ窮達時あり宋辱遲速ありとも八個の士甲乙なりそ
 中大江生仁字の玉とゆかり甲斐一仁進で餘の七は道行をまの自然の道理老
 侯との美を感悟あり當館も亦御同意也今一大士とゆかりかか如大功あり大
 取合る関の東敵ありあるそ等ゆか一日も二秋も異るまのそまと思ひぬまといへ
 庵主も俱諫めて蛭崎生の意見を理あり拙僧行脚二十餘年辛く七忠孝七

幼の玉を綴るゆれも尚關處仁の玉大江の在処を知りぬをち敷てのそ在り
 ける那人既安房在り拙僧他道導されも伏姫神の引接きて君の御用も達た
 是れ我にてもありし異るまの理りて推たの素是分身同因果る八士前後輕
 重ありんや開今ゆかり功あり功ありと存敗まは大江大功の賞とてそまを城
 主ふるこれをも敵の反回中らて遠く他郷退けれ一旦孤客とあり一日の始より功
 多ありんやとそ思ひける車ひくと君侯の疑解しも口口さる各と同日の死
 伏され各々遲速を造化の黙黙かか如く人知も量りかた恥多要きたとあり
 事と論せ七大地胸豁け俱微笑て現愆てあやまら親兵衛が大功は我
 們が用もたるとそま推並て虚名の勇士とわれんそ意も小這回も親兵衛の復素藤を
 生拘りて館山の城と抜くるま。とら俱小貌を改め誠意承りぬる法會果道
 徳俱一安房へまありて年来の恩招と謝しん今ゆかり存細けりと齊一畏のそま

宜は珍重と祝し具告す。長談脩話を長と思て耳教は與四郎屢點
 頭。听果て貌を更む且飲び演る言腐爛くいふ。今番大士招合見の使を命せ
 られ。死身在在下もの。死身の國王譜第の御家臣在下の亦道節の舊僕に新
 故の卑の差を認め且死身の年來大士招合を以て水火を避け諸國を徧歴
 度々泊び。這回在下先大士も逢ひ六七の大士御説を信へ。死身の才御代香の
 一役のまを本意をさる事皆序次あり。階級あり。是の亦伏姫神の神謀をさる在下
 死使を奉り大士江の逢逢を死身後に大士面會をさる。いふも多々鈍然似え
 と異日道節們は相俱て安房へ還ふ此上竟面目望足てい謙退の誠心を照文
 連の感嘆して。餘餘談を及びける。浩処の信乃道節莊小毛野大角現八小文吾們的七
 大士共侶のあり。階子と徐から登りて齊一坐席に入る。折道節の逸早。與四郎を
 見ると。世四郎然恙も死や好そ多れ哉。あつと尚。照文お揖讓して。信乃們俱お

坐と占れ。餘の大士信乃莊介現八と小文吾の荒井山と相識。いふも認らぬ毛野
 大角も。姓雪と。是の是の再會の情義を演或初對面の鉄釘を釘を
 與四郎の只額樹心て。集感涙の找む。覺照文をさる意と猜して。先道節們の
 信々と與四郎の亦水路も。風波の障りあり。却市河を赴て。依介夫婦親兵衛去向を
 ちの地と。路次をさる。照文を以て招合も。大士們俱旅宿の趣
 又親兵衛が。鮮示。條々生れ。道節餘大士們。便宜と。飲ひ。登時
 與四郎の頭を拾て。茶も。先道節の朝ひて。絶て久見。參。善。あつと。いふも。ま
 飲ひ。短詞。般。ま。小可音。音。兩個の媳婦們。再生の吉。又。趣。三。あ
 告。知。召。れ。言。省。左。右。伏。姫。神。の。真。助。生。身。の。幸。思
 本。も。只。心。苦。一。君。先。ち。富。山。を。始。料。國。主。御。父。見。參。入。り。な
 下。御。杖。持。の。下。召。措。れ。刺。今。番。登。崎。主。共。侶。の。傳。大。事。の。死。使。を。奉。り。ひ。の。語。話。

小瘦馬も過る荷は及の高はる猶も重く命の免れを不もてて故大江腰子俱して
 此世の那日より數るるなる我通稱の世四郎の世と與改めて與四郎と喚れははる惶るも君
 が名衆與の與の一字と賜りし心操をいへはれは君が御名代か身の逸早く安房の在の世
 四郎とぬ君が名あ一字と戴く名頭を故とすは愚僕が本性のそを饒まをるか
 いそくと繰返すと道節所へ感嘆して通愛を忠義の用心我名あ一字の所改ま儘ん
 そ左も右ものもさう同ぐの與四郎の與を改めて代の字の做す即我か代の義あり又與の字も
 捨てる今よりして姥雪代四郎與保と名告るねが保り則借平の借と這那同訓を共
 昔とせはるその誠心と後々も識者お示は不足のぬへ信のへも今も我も和老も里見殿
 仕へられ朋輩へ況我八名と招きある副使とすけの上坐す置該れも御説並御教書
 星義の婆崎生の賜を美り後る今又席の高低と論せももぬ一婆崎主掃園の
 折の爰と以西館の免執成と願ふとるも然與四郎の面目の身餘も感涙を復察

めあむ照文れをうちての趣誠お介へ都てあるゆと心とまれば六六士門も果断愛を
 道節が意見と好とを諾るけは然は是も與四郎の通稱の字と改めて姥雪代四郎與保と
 名告るの道節と主僕の礼儀と失は親兵衛餘の天士ともいふも敬けり却この
 折小文吾の代四郎を慰めて荒芽出で曳き單に即と趕失ひ折のり又親兵衛と他一家が
 六稔富山神の加護所る隨ふ云云のいもれは社介們次團太る孝嗣の昔と語の新し死
 言の交り果もを信乃の制め道節と俱お照文お告る我今目も大庵お赴は
 庵主の勤行暇折一霎時相譚ひつらち听いお不思議のゆひ知る如く大法
 師の今番の法事他の施主と求ま又當地の寺院お報て宗の幫助と借んと欲せは是獨
 坐二念お稱名看經の外他事多し一昨日の黄昏時候小年三千有餘る法師の徒係八
 九名と從へ来て大法師お談する者拙僧は這結城る某甲の院の住持へ聞ふ庵主の嘉
 言のむり當城没落の折戦歿する大將士平幾方の忠義の靈魂菩提の與ふる春よりして

大 庵 法 代 香 使 及 七



大 士 來 會 文 第 百 四 回 之 末



八犬傳九屏卷十二

九九

八犬傳九屏卷十二

八犬傳九屏卷十二

數十日常念佛間斷多。那諸靈魂の亡日。本月の十日。供養と遂め。あつた。松僧微力
 薄学なれども。開と灰の夢より。軟びて寝れ。供養の式を。幫助入與。推て愚直と告ぐる。
 本日供養の石塔波。何麻せませぬ。あつた。その準備あり。西のふ相心。此巨
 石あり。昔其頭。細流あり。一時土民の架。右橋なる。今埋れて。土中。是。主の
 石。造りて。石塔波。做。召。徒弟の内。中。石工の技。做。任用。の
 と。最町。寧。小。来。意。示。して。石。外。赴。持。来。鋤。秋。金。穿。起。三。尺。許。果。一。々
 土。中。の。長。八。尺。有。青。石。と。四。回。五。六。尺。有。石。兩。三。隻。あり。徒。弟。們。是。と。穿。出。して。水。と。汲。て。土。を
 洗。流。し。通。宵。塔。波。波。為。る。速。多。く。の。つ。も。あ。つ。た。曉。約。時。候。小。文字。を。送。由。多。く。彫
 果。て。隨。即。庵。主。指。揮。を。請。ふ。樹。植。隙。有。程。と。死。外。件。の。石。塔。波。と。な。け。り。その。細。工。の。精
 妙。多。く。一。夜。分。の。落。成。の。奇。特。の。庵。主。の。敬。馬。に。感。て。衆。僧。と。分。け。茶。と。唐。餅。が。入。り。て。大。道
 より。喫。ま。せ。供。養。の。折。復。を。來。れ。と。告。別。て。皆。共。侶。の。そ。く。の。去。り。と。ぞ。大。道

徳。件。の。奇。特。を。我。們。の。解。示。して。建。石。塔。波。を。せ。ぬ。小。実。是。凡。作。る。意。意。高。權
 者。の。所。為。る。也。因。て。我。毎。商。議。を。今。番。兩。館。も。寄。き。ぬ。布。施。物。の。遠。路。の。故。代
 金。を。一。庵。主。素。も。無。然。の。然。死。東。西。の。要。多。く。然。ら。ば。半。分。と。其。甲。寺。の
 師。徒。十。口。の。是。を。施。去。又。其。半。分。も。米。易。錢。を。兌。て。の。施。物。を。布。く。た。は。則。是。本。願
 主。の。功。徳。を。多。く。以。庵。主。告。言。同。試。か。大。師。軟。び。大。多。く。を。その。天。宣。を。多。く。登。崎
 生。高。量。と。布。相。計。ひ。ぬ。ぬ。の。餘。目。を。け。か。る。米。穀。經。紀。と。錢。鈔。を。見。肆。店。に
 立。て。任。せ。と。吩咐。し。程。を。多。く。の。多。く。相。計。ひ。ぬ。と。吾。れ。昭。安。諾。して。嚮。咱。們。大
 庵。主。赴。折。奇。法。法。師。の。安。内。を。せ。ぬ。それ。の。後。快。評。し。け。れ。余。代。四。郎。奇。心。稱。えて。來。經
 紀。の。程。を。多。く。の。目。の。暮。て。那。錦。務。店。と。昨。日。七。大。志。誂。の。衣裳。刺。縫。て。都。て。來。ぬ
 け。の。又。米。穀。經。紀。の。見。錢。見。ぬ。大。志。指。揮。從。て。主。管。者。各。一。名。小。厮。張。燈。と。兼。の。來。け。ぬ
 照。文。又。七。大。志。と。商量。と。布。施。物。の。代。料。百。金。と。兩。個。折。せ。却。五。十。金。法。會。の。幫助。する。ん

といひ那法師の布施す残る五十金と分ちて千金と施米の價を遣し千金銀を米
 由錢の明の朝辰牌あり大庵を送れそ那庵の地方に町堂の誨をけけ兩個の注管のる果を
 金と受合ありの實を寫し呈請して俱に宿所へ退りけり當下又照文の居士と相計り施の儲
 好といふも多し遊迹不知せし詣來ると巧きるとと極可五寸の紙牌百枚許の施のりやを
 寫さる人言れは時を移ま立地寫果し照文隨即伴當親兵衛の吩咐する宵件の報
 條路傍の樹の幹をさ或町々の門柱に貼りけり餘の明易書餉と店にふあるるまきと書林
 せと誦をり又燒香の折用を兩邊の席をさ君若朝崩を買見も準備送き杖葉程の夏
 夜更短くて寝る間もあを明のけり憐而照文の居士俱に浴湯し梳り早飯果て千餘個の主
 僕歇店に立出て大庵を赴けけ畢竟金碗、大法師の千餘年の宿念成就し右道福太念佛の
 結願供養の光景の出像とあふ載れを猶詳不知き欲其開り又這下の果鮮分るを聽終り

南總里見八犬傳第九輯卷之十七終

